

カントの先天總合判斷の最高原則について

大西友太

一

判斷の分析的制約から總合的制約に進んで總合命題の判斷に於て眞の先天總合判斷を見ると共にそれからの先驗演繹に於て一切の認識問題を正確に規定せんとするのがカントの『純粹理性批判』の根本的基調であつて、『先驗分析論』に於ては比量的悟性の總體性のイデアを直覺的悟性の全體性のイデアに止揚する點に於てこの總合的制約の先天總合判斷を見る企圖を示して居る。カントが感性と悟性との根源たる「心」の根本能力たる先驗構想力の直觀に於て思惟主觀の絶對的統一を見ると共に、これを先驗論理に聯關せしむる點に於て先驗演繹論を構成して居るのは即ちこれである。併し若しこの場合にこの絶對的統一の自我の内感の時間が直觀の受容性を有するといふことを手懸りとしてこれを先驗論理に聯關せしむる點に於て演繹するのでは、先驗統覺の必然性の眞理はあつ

ても思惟主觀の絶對的統一を只單に直觀に於て見るのみであるから、設令理性の認識するところを以て必然的に經驗と一致せしむる點に於て批判哲學の大なる體系を發展するを得ても、その思惟主觀の絶對的統一を只極限概念に於て觀察してこれを悟性の先驗論理に聯關せしむるに止まるのみである。その結果は必然的に比量的悟性の分析的制約に於て見られる統一を最大限度にまで擴張するに止まり、比量的判斷と同じやうに數學的原則を以て最高原則とする演繹的思想を出でなくなる。カントが『一切の總合判斷の最高原則について』に於て數學的原則を以て最高原則となし、この原則による總合判斷を以て純粹理性から先天的に生じ、隨つて一切の自餘の先天的認識の根柢となり得るところの總合判斷となし、純粹悟性の原則となしたといふことは分析的先驗論理からいへば全く當然であつて、カントの批判哲學に於けるこの最高原則論の節は『純粹悟性概念の圖式性について』の節と相並んで『原則の分析論』の論旨を最もよく示せるものとしてカントの純粹悟性の原則即ち先天總合判斷一般では最も大なる重要性を有する論文となつて居る。

一體もと批判といふことは分割を意味する言葉であるから、批判による以上は純粹悟性概念と感性的内容とに分れると共にその先天的統一として時間の先驗的圖式論を見るといふことは全く當然であつて、こゝにカントは先驗論理によつて範疇の客觀的妥當の經驗を見るを得たのである。隨つて又カントが「心」の根源的統一に溯つて總合命題の先天總合判斷を明らかにせんとするに臨み、そ

の根本能力たる先驗構想力的總合の表象に於て時間規定を明らかにし、分析的制約の先驗論理的認識に於ける圖式に對する規定を明らかにしてその先驗演繹論を一變したる場合に於ても内感の時間の受容性といふ點に於てこの先驗的圖式概念を重要視したといふことは敢て怪しむに足らぬことであつて、その限りカントの圖式論は改められたる形式に於ける先天總合判斷の可能性及びその妥當性の制約並びにその範圍を示すものとして『先驗分析論』の演繹論にはなければならぬものとなつて居る。

この點はカントの演繹論の批判としては第一に注意すべきものである。言ふまでもなく先天總合判斷の可能性の説明は形式論理に於ては問題とならぬけれども、先驗論理に於ては最も重要な仕事でなければならぬ。併し單なる先驗論理に於て感性的要素を先驗圖式を通じて範疇に結合する點に於て、先天總合判斷の制約及びその客觀的妥當性を明らかにする認識を見るのでは、その感性的要素なるものはなほ外的所與であるから明らかに分析的制約に於てしか先天總合判斷を見るものではない。したがつて眞の意味に於ける先天總合判斷を見るものでないから、カントは總合的制約に於ける先天總合判斷を見るべき必要から「心」の問題を介して感性和悟性との根源的統一の全體の根據に溯つて判斷を見んとする企圖を立てたのである。この點は第一版の『經驗の可能性に對する先天的理由について』に於て明らかに見られるところであるけれども、第二版に於て改めたるこの節に

該當する諸節、就中、第十七項、『統覺の總合的統一の原則は一切の悟性使用の最高原理である』に於ける神的悟性の總合命題の統一に於て明らかに論せるところである。この悟性に於ては比量的悟性の總體性は全體同時的直觀の全體性として止揚せられ、この全體性の感性的要素と範疇とが根源的に統一せられて思惟主觀の絶對的統一を構成して居ること斷る迄もないところであつて、カントはこの統一を以て根源的統一として演繹に於ける先驗統覺の説明原理として居る。この統一の自我の内感の時間が直觀の受容性を有するといふことを手懸りとして先驗論理的に演繹したのもその結果である。

併し嚴密に論ずるときはカントはなほ最も重要な問題をその背景に残して居る。カントによるときは自我の内感は自我の表象に過ぎぬけれども、この表象によつて主觀に於ける一切の多様が自發的に與へられるといふことであるが、若しこの表象によつて一切の多様が與へられるならばその統一としての總合の説明原理はこの表象に於て見られる自己意識ではなく、それよりもなほ深き根柢にあるものでなければならぬから、眞の演繹の説明原理としての總合作用は自我の内感に於て見られる自己意識には認められぬことゝならねばならぬのであつて、カントは自己意識の統一及び同一性を以て一切の認識に於ける演繹の説明原理として居るけれども、眞の説明原理はこれよりもなほ深き根據を有するものでなければならぬ。こゝにカントは「心」を只全體的直觀とか又は内感の

自我の時間が直觀の受容性を有するとかいふことを手懸りとして先驗論理的に演繹するよりも以上に、「心」その物の絶對自覺に歸つて前に演繹の説明原理とせる自己意識に何物かを加へたるものを以て眞の演繹の説明原理となさねばならぬ必要を有して居るのであつて、只單に「心」の根源に溯つて範疇と直觀とが統一されて居る主觀を直觀に於て見るのみでは不十分である。この直觀の「心」を感性的制約によつて經驗的に演繹する以上になほその根柢に於て先驗的制約その物を明らかにし、「心」の本質具體性に於ける先驗的統一を一切の總合判斷の原則として明らかにする必要があるのであつて、こゝにカントの數學的原則を以て最高原則とする演繹論がその企圖及び體系に於て一變せねばならぬ理由がある。前者の場合の演繹即ち内感の自我の時間によつて演繹する點では『先驗分析論』は大なる特徴をもつて居る。カントが柏林學士院の懸賞論文に應募して先天總合判斷を數學的總合にのみ許したるに對して、『先驗感性論』に於てはこの總合判斷の概念を擴張して感性の經驗に適應したが、『先驗分析論』に於ては一層深く自己意識その物に演繹の根源を見るに至つて居るのであつて、その限り總合原則の認識論上に於ける價值が異なり、カントのこれに對する態度は全く改まつて居るのである。同じやうに數學的原則といつても今や全く思惟主觀の絶對的統一の自我の演繹の原則となつて居るのであつて、カントがその認識批判に於て一切の總合判斷の最高原則と呼んだところのものもこれであるから、カントの先驗演繹論に於ては最も重要な關係をもつて居る

こと勿論である。カントが總ての對象を以て可能的經驗に於ける直觀の多様の總合的統一の必然的制約の下に立つとした原則が即ちこれであつて、この原則による限り先驗論理の必然的眞理を以て理性の認識するところを経験に合致せしむるを得るからカントのこの原則に對する信賴の念は非常に強い。この點に於けるカントの批判の正確性と眞理性とを見ずしては何人といへどもカントの批判哲學を理解することが出來ぬであらう。如何にカントが『先驗分析論』に於てこの原則を重んぜるか『純粹悟性は一切原則の體系』を見ればよく判るところであつて、何人もその眞理には反對すること能はざるところである。

併しカント自身この原則の體系論の終りの方に近づくに隨つてその出發點と異なる議論をなすやうになつて居ることも亦隠れない事實であつて、『觀念論々駁』に於てはこの數學的原則の演繹に於ては見ることの出來ない客觀的實在の事物を承認するのみでなく、『先驗辨證論』の『數學的先驗的理念の解決に對する結語及び力學的先驗的理念の解決に對する序語』に於ては明らかにこの數學的原則による演繹の抽象的なるを指摘して力學的原則による個物の演繹を見ねばならぬことを論じて居る。これ等の點から見るときはカントのこの數學的原則に對する信賴に於ては自らその演繹論上限定を置けるものと見ねばならぬ。勿論カントの考へる如く内的限定に屬するものは時間關係に於て表象するの外なく、隨つて「心」の内的狀態を直觀することは内感の時間形式による外ないのであ

るから、カントが『先驗分析論』に於て内感の時間を手懸りとして演繹を試みたといふことは當然でなければならぬのであつて吾々はこの外に演繹を考へることが出来ぬ。

故に若しカントがこの時間を手懸りとする先驗演繹論に於て先驗論理の數學的原則の承認し得るところのものとは異なる客觀的實在の事物の肯定に出でても、この原則その物を棄てるといふことは出来ぬ。只この原則の承認及びその徹底に於てこの客觀的實在の事物の肯定に進まねばならぬことは勿論である。一體もとカントのこの内的限定に屬するものが時間關係に於て表象されるといふことは、「心」その物が直觀に於て時間その物を規定するといふ根本的事實に基くものであるから、その限りに於てこの内的限定に屬するものを時間關係によつて表象するについてはその時間を規定するものとして「心」その物が同時的全體性に於て内在的に表象を規定せねばならぬのであつて、こゝに初めて時間關係に於て表象せられるものが「心」の内在に於て意味を有せる表象たるを得るのである。カントの『先驗分析論』に於ける時間を手懸りとする演繹には間違ひはないけれども、この點に於てその時間圖式の根柢にはなほ時間系列の總體性を同時的直觀的全體性に止揚し得るだけの空間圖式がなければならぬのであつて、この圖式の内在に於て時間圖式を見るとき初めてこの圖式がカントのいふ通り直觀の多様を内含するものたるを得るのである。カントの批判に於ては經驗を範疇の下に包攝することが中心問題であつて、カントはこれを所謂規則による時間の先天的規

定といふ概念の下に理知的範疇と感性的直観とが同時存在であるといふ點に於て解決して居る。先驗構想力の直観に於ては知覺は同時に範疇であつて直観することが同時に思惟することであるから、この構想力の直観に於て見る限り知覺が先天的時間規定をもつといふことは同時に規則による先天的時間規定をもつといふことであつて、必然的に範疇による感性的直観の統一といふことが考へられるのであるけれども、この場合にカントの最も重要視するところの規則による時間の先天的規定を介して理知的範疇と感性的直観とが同時に存在するといふことが認められるについては、特に感性的直観がその比量性の總體性から直覺性の全體性に止揚されて居ることを見ねばならぬ筈であつて、又その限り感性的直観といふことは全體の内在的規定に於て見らるべき意義ある多様であるを得るのであるから、カントの總合に於ける感性和悟性との關係は全く根源的同時的である。範疇の感性による實現といふことは單に時間圖式を通せる變化現象に於ける實現をいふのではなく、空間圖式を通せる實體的永久存在に於ける實現をいふものでなければならぬのであつて、範疇は直観なきときは經驗に於ける對象をもち得ぬといふことがカントの全理性批判の前提となつて居るけれども、その直観なるものは先驗構想力の直観なる點に於て經驗に於ける比量的悟性の時間に於ける直観とは全く異なつて居る。この悟性の比量的直観の總體性を直覺的悟性の全體性に止揚せる意義ある感性的直観についていふのである。

併しこゝに到るときはカントが内感の自我が直觀の受容性を有するといふことを手懸りとして、この自我の思惟的主觀の絶對統一を先驗論理に聯關せしめて數學的原理によつて演繹したといふことはなほ深く考へねばならぬ問題を提供するものであることを忘れてはならぬ。第一この自我の内感の時間が直觀の受容性を有するといふことは只比量的悟性の時間に於ける直觀の受容性を有するといふことでなく、この受容性の根柢に於て直覺的悟性の全體性に於て示さるべき空間に於ける直觀の受容性を有するといふことでなければならぬのであつて、所謂規則による先天的時間規定を介して範疇を感性的内容に結合するといふことは、規則による先天的空間規定を根柢に有するものとして意義ある全體的存在の感性的對象に結合するといふことである。随つて若し規則による先天的時間規定を介して範疇の實現を求めらば、無限の時間の系列に於て實現するの外なきものを現存同時存在の全體性に於て實現するものといはねばならぬ。随つて又その限り内感の自我又は絶對統一の思惟的主觀が完全に客觀的に實現せられ、自我それ自身は全く自己を顯現して客觀の現實的實在を肯定せねばならぬ點に於て最も注意すべきものがある。

この點はカントの『先驗分析論』に於ける演繹論の批判に於ては重大なる結果を生ずるものでなければならぬのであつて、私の後に至つて次第に明瞭にしたいと思ふところであるが、カントは、私は思惟するといふ命題は私は思惟しながら實在するといふことを意味する限りに於ては單なる論理的

機能ではなくして主觀を實存在に關して規定するものであると論じ、而してこの規定を以て内感の時間規定と解する限りに於て、物自體その物の存在に關して規定するのではなく、只現象に關して規定するに過ぎぬと考へて居る。併しこれは只内感の時間規定に於て現象の客觀を見るに過ぎぬのであつて、その限りに於て私が思惟するといふことは私を實存在に關して規定するといつても只現象に關して規定するのみである。實在に關して規定するといふことではないのであるから嚴密なる意味では實存在に關して規定するとはいはれぬけれども、この時間規定の根柢には空間規定があり變化現象に對する永久實在の規定があるから、私が思惟するといふことが私を實存在に關して規定するを得るのである。又それであるから合理的心理學のイデアが内面的必然的に宇宙論のイデアに至るのである。私は思惟するといふことは先驗論理に於ていふ限り私を存在に關して規定するには違ひないけれども、これでは只その思惟の眞理性は主觀性の事柄に止まり、客觀的實在の眞理それ自體には至らぬのであるから嚴密なる意味で存在に關して規定するとはいはれぬ。これにはその思惟の眞理性の契機を客觀それ自體に於てもつのみでなく、なほこれを絶對的思惟の契機となし、自覺的知識實在の契機となす絶對自我の絶對統一がなければならぬ。自我はその内感の必然によつて一度は全く自己を否定して客觀の實在を肯定し、これを思惟の契機として思惟する點に於て對自的自然に對して自覺すると共に即自的自己に於ても自覺し、隨つてその限り演繹の一切制約を總合的統

一に於てもつものたるを得るのである。既に述べた自我の内感が自我の表象に過ぎぬに拘らずこの表象によつて主觀に於ける一切の多様が自發的に興へられるといふことはこの卽自的對自的絕對自覺の自我に於て初めて言はれることであつて只感性と悟性との根源たる「心」の直觀に於て見らるべき自我としての絕對統一の思惟主觀に於て見られることではない。これでは客觀を肯定すれば主觀を否定せねばならぬ。主觀を實存在に關して規定するといふことはない。カントの内感の自我を根本とする演繹は『先驗分析論』に於ては解決されざる問題であつて、『先驗辨證論』に於て總合の諸制約の總合的統一のイデアを明らかにする企圖に至つて解決せられる理由はこゝにある。『先驗辨證論』の絕對自我に於てのみ自我は唯純粹に自己自身を思惟することによつて實在するといふことがいはれるのである。カントが『觀念論々駁』に於て客觀的實在の事物を考へ、數學的及び力學的先驗的理念の解決に關する節に於てこの事物の演繹を考へたといふことはこの絕對思惟に於てこの事物を以て真理の契機とするのみでなく、なほこれを自覺的知識實在の契機とする絕對自我に於ていはるべきことであつて、こゝにカントは物自體のイデアに達するのみでなく、なほこれを認識論的に規定せねばならぬ點に於て深く思辨哲學に進まねばならぬ必要を有する。

カントが數學的原則による範疇の演繹を論じ、その圖式的限定を以て演繹の根本思想としながら、『觀念論々駁』に於て事物の客觀的實在を認め、その存在が時間に於ける自我の現存在を規定すると

いふことを認める如きことは、一見するときには如何にもその觀念論に反對するものゝやうに見えるけれども、これは客觀的實在を主觀的觀念論から見るからである。眞實のカントとしてはこの實在を肯定せねばならぬのみならず、なほこれを肯定する圖式の内面的必然性に基いて本來的にその内在的合理性を承認し、随つてその限りこの實在が唯一の思惟の契機であり得ることを承認せねばならぬのである。カントの範疇の演繹論に於ては先驗論理的に數學的原则を介する限り自我は一度は自己を否定して客觀の獨立實在を肯定し、然も普通に解せられたる物自體の如く非合理性に於てこれを肯定するのではなく、却つてその非合理性の内在的否定の合理性に於てこれを肯定せねばならぬ。カントの『經驗の類推』に於ける力學的原则もこの點に於てのみ理解さるべきことであつて、カントはこの力學的原则の演繹を介して必然的に辨證法哲學の途を通つてその客觀的實在の合理性を思惟の契機として絶對自我の絶對思惟に歸ると共に、その批判の徹底によつてこの自我を一切演繹の制約の總合的統一に於て明らかにする點に於て演繹論の最も大なる特徴を有する。

『先驗分析論』に於ては既に述べた如く比量的悟性の先驗論理的演繹の根據を「心」の根源的全體性に於て求める點においてカントは前者の悟性の總體性を直覺的悟性の全體性に於て見るに至つて居るのであるけれども、只これを直觀に於て見るのみではなほ分析命題的觀察に過ぎぬからカントは進んで總合命題に於て觀察し、随つてこの全體性に於ける内容と總合原理との關係を考へねばなら

ぬやうになつて居るのであつて、このためには第一この全體性の直觀その物の内面的規定を明らかにして直覺的悟性に對する直接的關係に於てこの悟性の思惟の眞理を客觀的に保證する實在を見ねばならぬのである。こゝに批判哲學に於ける辨證法の必要があるのであつて、カントの演繹に於ける原則の使命はこの點に於て他の哲學で見られない必然性と明晰性とを以てこの直覺的悟性の全體性の自我から客觀的實在の自然を演繹すると共に、その自然の内面的必然性による思惟契機の顯現によつて自我は絶對自覺その物に歸つてその思惟を明らかにするにある。

この點に於てカントの原則は最もよき辨證法的發展の階段を示すものといへる。この原則に於て全體の直觀が自己自身を否定して客觀それ自體の獨立を肯定するを見、直觀それ自身が自己の性質を最もよく實現して客觀それ自體に於て思惟の契機を明らかにし、改められたる意味に於て思惟を要求すると共にその眞理性を客觀的に保證することを見るを得るのであつて、この思惟に於て初めて吾々は自我の奥底に存在せる眞の總合作用を發見することが出来る。經驗の有限的對象の認識から無限に達し、無限に於て有限が眞理その物に達することは勿論であるけれども、なほこの無限の總合的規定に於て有限その物の眞理を見ねばならぬ。既に述べたカントの原則として總ての對象を経験の多様の總合的統一の必然的制約の下に於て見るといふことも本來はこの多様を吾々が認識せぬでも獨立に客觀的に存在する物自體的事物の眞理として見るときにいはるべきことでなければなら

ぬ。カントが對象それ自體を先天總合的に規定する點に於て範疇の起原を見、その演繹の根本問題を解決せんとしたことは深く吾々の注意すべきことである。カントは總合的制約を特に重要視せる第二版にて『觀念論々駁』を加へて客觀的獨立の事物を肯定するのみならず、『先驗辨證論』に於てこの事物の演繹を論じ、神のイデアに於て一切總合の諸制約の總合的統一を見る點に於てその演繹論の完成を見ようとせることは深き意味のあることではなければならぬのであつて、思惟の明證とかその眞理性の客觀的保證若しくは對象の構成とかいふことはこゝに初めて直接的意識に於て考へられるのである。

カントが分析命題から進んで總合命題に於て先天總合判斷を見んとする精神を徹底して、直觀に於て見る絶對統一の思惟的主觀を批判によつて先驗論理的に規定するときは必然的にこゝに達せねばならぬ。カントが『先驗分析論』に於て内感の時間を手引きとして演繹する限りその原則は數學的であるけれども、この分析論に於て原則と呼べるものは『先驗感性論』に於けるものとは異なり、感性的認識の先天的制約ではなく、全く内感の自我の時間を手懸りとする先驗統覺の原則であるから、所謂「規則による時間の先天的規定」によるものとして全く自我の先驗演繹の必然の原則であつて、その限りカントの先驗演繹に於てはこの原則は頗る重要な原則となつて居る。『純粹悟性概念の圖式性について』に於ては數學的の原則が根本的に重要視せられ、而して又この圖式性についての章

と直接聯關せる『純粹悟性の一切原則の體系』では「悟性の感性への限定」といふことを以てその演繹の根本概念となし、この限定を數學的及び力學的原則に於て論じて居る。『現象體と理體』及び『反省概念の多義性について』に於てはこれ等の原則の正確性と必然性とを重要視して範疇の經驗的使用の證明をなして居る。殊にこの多義性の節では極端といつてもよい迄にこれを重要視し、これによつて先驗演繹の諸問題を決定せんとするの態度を示して居る。内感の時間が直觀の受容性を有するといふことを手懸りとして根源的自我を先驗論理的に演繹する以上は、カントのこの態度は必然であつてその間に何等の非難すべきものもない。併し既に述べた如くカント自身『純粹悟性の一切原則の體系』の終りの方にあつてこの演繹に於て承認さるべき對象とは異なる個物の世界を肯定して力學的原則の演繹論をなして居るのみならず、『先驗辨證論』の『數學的先驗的理念の解決に對する結語及び力學的先驗的理念の解決に對する序語』に於てはこの個物の演繹を演繹論の本來の問題として論ずる傾向を示して『觀念論々駁』の思想を直接的に發展して居る。これ等の點はカントの演繹論に於ては稍不思議に感ぜられるところであるけれども、内感の時間なるものがその根柢に於て空間圖式概念を豫想し、「心」の全體的直觀に根本的に規定せられて居る以上は必然的に見らるべき結果でなければならぬのであつて、その限りカントの『先驗分析論』の先驗演繹は自我から出發すると共に自我を否定して客觀的實在を肯定し、然も內在的合理性の主張に於てこれを肯定するも

のとなつて居る。この點に於てカントの『先驗分析論』は全く客觀的獨立の自然及びその思惟の契機を明らかにするものといへる。『先驗分析論』の自我も絶對的統一の思惟主觀であるには違ひないけれども全く直觀の自我である。「心」の根源的統一に於ける自我を直觀する點に於て思惟主觀の絶對統一を演繹の原理とするのであるから、その時間圖式による先驗論理的演繹は必然の結果としてその根柢に認めらるべき空間圖式の規定によつて客觀的實在の事物を肯定すると共に、その反面に於て直觀の自我その物を否定せねばならぬのであるけれども、この否定は自我の直觀その物の性質を最もよく實現するものとして直接自我自身をして自己を思惟せしめ、即自的絶對自我をして自覺的に自己自身を思惟せしむる唯一の契機となるのである。絶對思惟は眞理の契機としてそれ自體存在するものを自己自身に有つのみでなく、なほこのそれ自體存在するものを自覺的知識實在の契機として有するものでなければならぬ。それ自體存在するものは自我の否定ではあるけれども、この否定に於て自我は最もよく對自的に自己自身を見、隨つて又その限りに於て否定を通じて自我は最もよくその即自的絶對を自覺に映す絶對的知識實在たるを得るのであつて、この知識實在に於ては最早客觀を主觀に統一するのではなく、獨立の主觀と客觀とをその背面に於て統一し、隨つてその自覺に於て演繹の一切内容とその統一の原理とを得るのである。カントが自我の内感の表象に於て主觀に於ける一切の多様が獨立に興へられると考へ、隨つて又この多様の統一の原理が見られると考

へたこともこゝに至つて初めて正式に承認せられるのである。随つてその限り演繹が根本的に承認せられるのである。

カントの『先驗分析論』に於ける特徴はこの點から見るときは全くその數學的力學の原則を通じて辨證法的に演繹の否定的方面を明らかにするものといへる。カントの演繹に於て數學的原則といふときは勿論『先驗分析論』に於ける原則をいふのであつて、具體的には『經驗の可能性に對する先天的理由について』の『直觀に於ける覺知の總合について』の論文が第一に注意さるべきものとなつて居る。勿論この項に於て見るところの數學的總合のカントの概念は今日の數學から見るときは既に古典數學に屬するものといふの外ないから、數學的認識に對する哲學的批判から見るときは不完全なるものゝあることは免れざるところであるけれども、然も『直覺に於ける覺知の總合について』に於てカントが古き獨斷的數學に對する新らしき批判的數學の基礎を置いたのみでなく、なほその數學的認識の原則に對する知覺の規定を「心」の根本能力に於て考へると共にこの知覺の概念的總合に於て認識作用の完了を考へた精神に至つては今日も依然として吾々の尊重せねばならぬところである。この節の三つの總合では後のものほど前のものゝ豫想となつて居るのであつて、概念の總合に於て三つの總合の諸制約の統一を明らかにするのがカントのこの節に於ける所論の大様であるといへる。後にヘーゲルが數學的認識を以て理性の認識でないから本來哲學的認識問題に屬せぬとい

ふ意見を以て數學的認識の批判に臨んだのもカントのこの節に於ける意見と異なるものでなく、數學はその分析的論理の性質によつて吾々人間の先驗論理的認識を「心」の内感にまで導き入れ、その本質の聯關によつて先驗的に演繹することが出來ても、「心」その物の總合的統一に遡つて認識を明らかにするものでないとするカントの意見を承認せる上のことでなければならぬのであつて、數學の特徴はその基本とする直觀が根源的自我の純粹直觀の規定であるから、この直觀その物を客觀的に顯現し、隨つてこの直觀それ自身では非合理性であるといふの外なきものを合理性の客觀的實在となし、その限りに於て客觀的實在を以て唯一の思惟の契機とする。尤もこれについては既にも述べた如くこの數學的總合の根柢をなす内感の時間概念をその直觀の受容性の根據に於て全體同時的把握の空間圖式概念によつて補充せねばならぬこと勿論であつて、この補充に於て初めて合理性の客觀的實在の演繹といふことが考へられるのである。隨つてその限りカントの批判に於ける數學的原則は力學的原則に發展せねばならぬとともにその力學的原則は數學的原則の合理性を客觀的實在に於て示すものとして本來的には直觀の絶對實在性を客觀的合理性に於て顯現するものといへる。それだけに數學的原則はいふ迄もなく力學的原則も本來的には直觀の直接的事實を否定して客觀的真理又は實在を肯定するものであるから、全く演繹の客觀的方面に係るものとして演繹その物の主觀的概念に關係するものではないのである。隨つて批判からいふときはこれ等の原則による演繹は

主觀作用その物を見るものでなく、この作用の根柢に直觀を横たへるものとして只即自的絕對自我の演繹を客觀的方面に於て規定するに止まつて、この自我その物の直接的規定をなすものではないのであるから、なほ深く反省せねばならぬ問題を有すること勿論である。

カントが伯林學士院の懸賞論文から『先驗感性論』に進み、『先驗分析論』に躍進して今もいつた如く數學的力學的認識に對して劃期的なる批判を加へながら、『先驗辨證論』に進展して愈、哲學本來の立場に於て演繹問題を論ずるのであるから、その限りその原則概念を一變し、少くとも『先驗分析論』に於ける原則を棄てねばならぬ立場にあることは否定されぬ。カントがその演繹に於て數學的方法を重要視して居ることは事實であつて、恐らくカントが内感の自我又は絕對的統一の思惟的主觀を先驗論理に聯關せしめ、數學的原則を以て演繹する點に於て、先驗統覺の必然の眞理を以て認識問題を解決するほどその『先驗分析論』に大なる功績を與へるものはないであらう。『先驗分析論』はこの點に於て最も大なる光輝を發して居るといつてよい。併し既にも述べた如くに分析的制約から總合的制約に進んで判斷を考へるのがカントの『先驗分析論』の根本的特徴であると同時に、又『純粹理性批判』全體の根本的特徴でなければならぬのであつて、その限りに於てこの數學的方法に對して認識論上制限を與へるのも亦カントである。カントの『純粹理性批判』全體に於ける企圖からいふときは『先驗分析論』の數學的原則は思惟主觀の即自的絕對統一の自我から先驗論理的に演

釋するのであるけれども、これではなほ直観を演繹の基本とするものであつて、その限り分析的制約の總合判断をしか見るものでないからカントは「心」その物の根源に遡りそれ自身の總合的性格に於て總合判断を見んとする企圖を立てたのである。

この點を注意せぬ限りに於ては必然的にカントの『先驗分析論』に於ける數學的原理は只即自的絶對自我を先驗論理に聯關せしめて演繹するのみであるから、先驗統覺の必然を以て理性の認識を以て經驗と結合せしむることを得ても只現象一般の演繹を見るに止まる。随つて『先驗辨證論』に於てもこの演繹の感性的制約の系列を無限に遡つて無制約者を見、そのアイデアから演繹する方法を講じても實は只この感性的制約による『先驗分析論』の演繹を無限に擴張したといふのみに止まるから、所謂合目的性の統一を與へ得るに過ぎぬ。『觀念論々駁』に於て見る客觀的實在の事物の演繹といふ如きことは見られぬ。随つてその限りに於てはカントの演繹論は『先驗分析論』殊に『先驗辨證論』に於けるアイデアの演繹論に於て混亂に陥つて居るといはねばならぬのであつて、如何にしても『觀念論々駁』に於ける事物の演繹を『先驗辨證論』に於ける數學的力學的先驗的理念の解決に關する節に於て論ずるのみならず、『人間理性の自然辨證性の究極意圖について』に於て自然の體系的目的論的統一のアイデアを論じて居る企圖とは一致せぬところである。併し私は總合命題に着目する限り眞のカントの『先驗分析論』に於ける演繹を以て即自的絶對自我に對應する客觀的實在の肯定にあるものと

考へ、隨つて『觀念論々駁』の事物の概念から以上の諸節に於ける自然辨證性の概念を以てカントの正當なる立場の概念とせねばならぬものと考へる。

『經驗の類推』に於ける『相互作用又は協同體の法則による同時存在の原則について』は私は客觀的實在の内在的合理性を證明しそれが思惟の契機であることを明らかにせる最も注意すべき論文であると考へる。又『經驗的思惟一般の公準』がこの客觀的實在を以て客觀的事物と解し、この事物を以て思惟の契機とする絶對自覺の自我の認識に進むべき準備を作れることは興味あることである(後述參照)。カントの『先驗分析論』に於ける演繹論としてはその原則の概念は必然的に「心」の絶對統一の即自的主觀を一度は否定して客觀的實在を見ると共に、その實在が唯一の思惟の契機であることを明らかにして、その對自的自己否定から再び絶對的自己肯定に歸らしむるになければならぬものである。初め即自體に於て明らかにすること能はなかつた主觀の統一その物を明らかにして、一切の演繹の制約の總合的統一を即自的對自的自覺の絶對自我に於て見るためになければならぬ唯一の方法を示すものである。この點を見ずしてはカントの哲學は判らぬといつてよい。私は唯この點に於てのみカントの『先驗分析論』に於ける原則の價值を明らかにし得るものと思ふ。又その限りに於てカントの『先驗分析論』は何れの哲學よりもその批判に於て勝れるものと思ふ。

感性とその領域たる現象界とは物自體その物に關係するところなく、只吾々自身の主觀的性質に

よつて事物が吾々に現象する仕方へのみ關係するやうに悟性自身から制限されて居るといふのがカントの『先驗感性論』全體に對する結論であつて、カントは『先驗分析論』に於て先づこの感性論の先驗論理を「心」それ自體に聯關せしめて居るのである。又その限りに於て既に述べた如く内感の時間を手引きとする「心」の先驗論理的演繹論が見られて居るのであるから、純粹悟性概念をその圖式的限定に於て經驗的に使用すべき規則及びその限界を明らかにすることが『先驗分析論』に於ける先驗演繹論の最も重要な問題とならねばならぬのは當然である。この點は『概念の分析論』の第二章『純粹悟性概念の演繹について』を見れば最も明瞭なるところであつて、その限りに於て純粹悟性概念の圖式論も現はれて居るのである。併し若しかく時間圖式を介して限定的に演繹するならば、一體カントがこの方法を哲學の範圍内に導き入れたる先驗構想方の知覺なるものは感性と悟性との根本能力に於て考へられるものであつて、その限り比量的悟性の總體性のイデアを直覺的悟性の全體性のイデアに止揚せる點に於て見らるべきものであるから、その圖式性としては時間的なるよりも根本的に空間的なるものでなければならぬ筈である。随つて時間が直觀の受容性を有するといふ點に於て思惟主觀の絶對的統一を先驗論理的に演繹する根柢に於て、カントは空間が直觀の受容性を有するといふ點を手懸りとしてこの絶對統一の主觀を先驗論理に聯關せしめる點がなければならぬのみならず一體この圖式を規定するものは知覺それ自體であるから、カントの直覺的悟性の總合は

この知覺の內在的總合として直接無限的對象の總合的規定に於て有限的對象を見ねばならぬのである。時間圖式を介して絶對的統一の自我を數學的原則によつて演繹するのではその演繹の根據を限定的に實現する外ないけれども、この根據その物に於てはこの限定的に實現さるべきものゝ總體性を全體性に於て有し、全體同時的存在として一切の限定的演繹を根本的に規定して居らねばならぬことは先驗構想力の直接的意味から見て何等の疑問もなきところであるから、その限りカントの批判では數學的方法によるといふことは時間圖式を介する範疇の現象的限定的實現に對して空間圖式を介する全體同時的實現を承認するにある筈であつて、カントの『先驗分析論』に於ける數學的原則による演繹の眞意はこの點に於て力學的原則の演繹によつて現存在の事物實在及びその合理性に於ける思惟契機を明らかにするにある。カントは『先驗分析論』に於て「心」その物の根柢に遡つてその絶對統一の思惟主觀を分析的論理の數學的原則に聯關せしむる點に於て先驗論理の嚴密性を以て現象を演繹して居るけれども、その眞意はこの演繹の現象性から遡つてこの「心」それ自體を顯現せる實在を見、隨つてその實在を規定する總合その物を見ねばならぬのであつて、演繹の無限系列の極限に於てのみ十分の意義ある認識を得んとすること、又得られるといふことはその本意ではないといはねばならぬ。

併しこの點は又カントの物自體の問題に對して解釋を異にせねばならぬ點に於て一つのアポリア

をもつから、カントの演繹論の批判は込み入つて來ること勿論である。カントによれば物自體はその質料に於ても形式に於ても非合理性のものであるが、若し力學の原則による絶對統一の主觀原理の演繹を以て以上の如く解するときは、この主觀の直觀その物を客觀的に現はにしてその非合理性を合理性に轉換する點に於て現存在を見ねばならぬから、カントの解釋と異なつて來るやうであるけれども、實際のカントは物自體をかく解する點に於てその思辨を明晰なる批判に移し、その總合の規定に於て實踐問題をも見るを得るのであつて、恐らくカントがこの點に於て思辨を去つて批判に於て實踐問題を明らかにすべき途を開けるほど注意すべき問題はなく、力學の原則を介する演繹に於て最も嚴密に自我の辨證法的發展を規定しながら、然もその絶對自我の總合的統一性格を明らかにする點に於て自然の演繹を完全に明らかにすると共に、なほこの自然を實踐の立場に取り入れて觀察し、絶對自我に歸つて新らしき解釋を下して往くべきことを吾々に教ふるほどその批判哲學の目覺しき事業はないであらう。カントの批判哲學に於ける辨證法的特徴は異彩であること勿論であるけれども、ファイヒテやヘーゲルの辨證法と異なつて特に原則の概念を以て自己否定の自然を明らかにすると共に、これを絶對自我の立場に總合して往く批判の明晰さは更らに一層の異彩でなければならぬのであつて、カントを見るものはこの點に於て特にファイヒテやヘーゲルと區別して往かねばならぬ必要がある。

カントにはヘーゲルほどの思辨的天才はないかも知れぬが辨證法的思惟方法でヘーゲルの思辨の絶對自我の絶對的統一を明らかにし、この統一を自覺的總合に於て明らかにする點ではカントは眞に古今に秀でたる哲學者でなければならぬのであつて、その卽自的絶對自我に範疇の起原を求めると共に、一度これを否定せる客觀的實在を通して卽自的對自的絶對自覺の自我に於て範疇演繹の根據を明らかにする點には十分吾々の注意すべき論理の徹底がある。絶對統一の思惟的主觀は演繹の根源であるけれども、なほその統一を直觀の卽自的絶對に於て見るものであるから、批判からいふときはこれに先驗論理を聯關せしむる點に於て一度は客觀的實在の演繹としてこの自我は自己自身を否定して實在の自然を肯定せねばならぬのであつて必ず形而上學の對象としてのイデアの肯定を見ねばならぬ。これだけのことはカントが先驗構想方の問題を介して「心」の根源的統一に於て思惟主觀を求めながら先驗論理的にこれを演繹せる『先驗分析論』に於て最も明瞭に見らるべきものであつて、『先驗辨證論』に於てはこれをイデアの問題として改めて論じたまでである。イデアの演繹論としては固有の問題の『先驗辨證論』に多いことは勿論であるけれども、『先驗分析論』に於ける範疇の演繹論に於てもその起原及び演繹の可能根據に於てイデアの演繹論に觸れねばならぬ。只狹義にカント自身の論せるところを解するとき、カントはこの絶對統一の思惟主觀の演繹から現象を見て居るのであつて、事物それ自體を見て居るのではないのであるから正式に形而上學の領域に到

らぬといはねばならぬこと勿論であるけれども、實際この場合に於けるカントの如く統制原理的使用の形而上學的理念をもち得るといふことそれ自身が既にそのイデアの直觀の全體的根據に於てこのイデアのエクジステンツを承認し物自體その物の存在を肯定すべき理由を内在せしめて居らねばならぬのであつて、この存在その物の無限の眞理に於て有限の存在を規定するのがカントの本來の原則である。カントは『構想力に於ける再現の總合について』に於て客觀的秩序の事物の存在を経験の直觀の基礎條件として承認して居るのみならず、『觀念論々駁』に於ては明らかにこの事物の客觀的實在を肯定し、『先驗辨證論』の力學的先驗的理念の演繹に於てはこの實在の事物の演繹を論じて居るのがこれである。『先驗分析論』の特徴として一切の分析的認識に於ける主觀の統一及び同一性に對して一切の現實を表象として内屬關係に於て統一することを認める點に於て形而上學的實體的主觀を承認せねばならぬ結論を有せる以上は、この分析論が辨證論に進展すべきは全く必然でなければならぬとさへいへる。總合命題の必然がこゝに達せしめるのであつて、カントの演繹の特徴は範疇の起原を合理的心理學のイデアに求めるのであるけれども、これを先驗論理に聯關せしめてこの論理の範圍内に於て明らかにする點に於てその哲學が先驗哲學であると共に、事物その物の合理性を明らかにしてこれを以て思惟の契機に轉換し、その即自的實在を以て眞理の客觀的保證とする絶對思惟に於て一切の總合の諸制約の總合的統一を明らかにするにある。随つてカントの總合原則

の批判はこのエクジステンツとしての物自體を總合的規定に於て見る點で事物を限定せねばならぬのであつて、私の批判の前途はなほ遼遠であるといつてよい。以上述べたところは只カントの總合の精神に基いてその原則批判の材料を提供したるに止まる。(未完)